人情あふれるまち

古い町やからか分かりませんが、駒ヶ林は人情あふれるまちやと思います。**みそ・しょうゆの貸し借りは当たり前**やったし、貰いもんはじきにおすそ分けに廻ります。旅行に限らず少し遠出をしたら、何か珍しいものを見つけてお土産を買ってきてくれますし、入院したら大勢の人がお見舞いに来てくれるので黙って病気もできません。
常日頃からあいさつを交わし顔見知りやから、色々な情報が回るのも凄く早いんです。このつながりが震災などの災害時には大変役に立ちました。
最近は違いますが昔は扉に鍵を掛けたことはなく、「こんにちは」と声をかけたら、もう部屋に上がってるという感じでした。腕白でゴンタな子供さんでも、地域で声をかけて見守るというようなところがあります。また、昔は**「やったりもうたり」**というて駒ヶ林の人同士で結婚することが多く、そうなるとまちの中に親戚がたくさんいるためおのずと悪いこともできなくなったところもあるようです。
こうしたおつき合いは、わずらわしい所もあるけど、やっぱり良いもんやと思います。

路地のまち

駒ヶ林の路地は入り組んでいて狭いけど、昔は街道と呼ばれ荷馬車や神輿が充分通れる道もあったんです。でも今ではほとんどの路地が狭く、隣のおかずが匂いで分かるほどやね。
子供のときの遊び場は浜辺と路地とがあったけど、小さい時分は路地でよう遊んだねえ。たいていガキ大将がおって自然と子供らが集まり遊びが始まってた。**バイ（ベーゴマ）**や**ラムネ玉**を使った遊び、**メンコ、スイライボッカン、**コマを手の平で回しながらする**追い駆けっこ**とか、路地ならではの遊びもたくさんあってその道具も自分らで工夫して作ってたなあ。
車の入れない路地、地道は大人になれば不便かもしれんけど、子供らにとっては良い遊び場やった。カミサンなんかは結婚してからこっちにきたから、最初は道がわからんと迷子になってたねえ。もう30年位になるけど、いまだに**奥の方の道はようわからん**、迷うし行けへんって言うてるよ。

KOMAP 2003

駒ヶ林まちづくり協議会

駒ヶ林まちづくり協議会では、地域の様々な事柄について話し合い、活動しています。
この**「駒っぷ」**づくりもその活動の一環です。
今後ともよろしくお願いします。

「駒っぷ」を作成したメンバー（50音順）

浦井 清五	岡田 隆義	小畑 徳江	面出 輝男
貝塚 元良	来田 昭子	北村美代子	小林 昌彦
紺社 昭三	辰巳 昭子	俊成 公司	中西 厳
中本 正	美濃 逸子	室田千恵子	山口 教一

「わたしたちが作ったんです！」

※この地図のキャラクターの林駒子さんと林駒夫さんは「駒っぷ」の作成に関わった、駒ヶ林まちづくり協議会の役員のイメージを合成して作成しました。

発行：駒ヶ林まちづくり協議会
会長・中本正 TEL：078－611－9313

平成15年３月

駒っぷ －KOMAP－

駒ヶ林まちづくり協議会

▲写真は、地域に伝わる左義長（さぎっちょ）の祭

駒ヶ林って… どんなとこ？

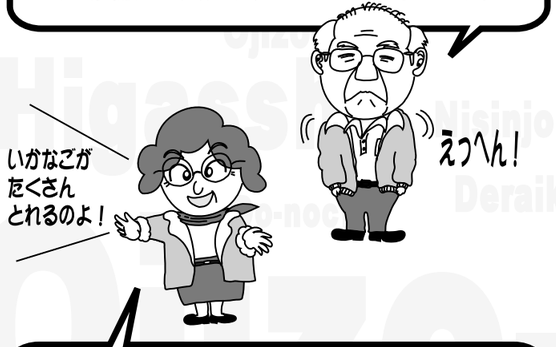
こんなとこ～！

駒ヶ林はたいへん古くからの**『歴史あるまち』**です。そして昔から**『漁港のあるまち』**として賑わってきました。また狭く入り組んだ道でつくられる**『路地のまち』**でもあります。そんなまちでの暮らしから親密なおつき合いが生まれ、今は**『人情あふれるまち』**だとみんなは考えています。こんな駒ヶ林のまちの特徴やお宝を、このマップでは御紹介します。

駒ヶ林のまちの特徴

歴史あるまち

駒ヶ林の歴史は古く、奈良から平安時代にかけて遣唐船の出入りが大輪田泊にあった頃、その船繋所であったと言われてます。
また神功皇后が朝鮮に出兵した折り、**高麗（こま）**からやって来た多くの帆船の**帆柱が林のように見えた**、あるいは**「高麗返し」**が転訛したなど、駒ヶ林の地名の由来には多くの説があって、平清盛が安芸の宮島に参詣する途中**「小馬林」**に着いたという記述も残されてます。
また駒ヶ林ならではの風習も多く持ち、昔は網入れの優先権をこれで争ったという**「左義長(さぎっちょ)」**の祭りは長田港が埋め立てされるまで続き、千年の歴史を持つともいわれてます。
また国内貿易で得た資財を投入し兵庫運河を開発した**八尾善四郎(やおぜんしろう)さん**や、兵庫県水産会連合会長となって神戸の水産業を先導した**小畑種吉(おばたたねきち)さん**も駒ヶ林の出身で、神戸の発展に大きく貢献した人材を輩出してきているんです。



漁港のあるまち

駒ヶ林は古くからの漁港で、大昔から魚市があったと伝えられてます。そのため行事も多く、特に蛭子神社のお祭りでは漁師がお祓いをしてもらったもんです。ハヤシの市場で商いされた魚は**「ふり売りさん」**が各地に売って廻り、中には京都の料亭まで行くものもあったんです。採れる魚は季節ごとに異なり、それを目指してぎょうさんの漁師、加工屋、商人が集まりました。昔は奥さん方も加工の手伝いをしたもんです。北の方には田んぼもあって、そやさかいハヤシは漁師町というより**半農半漁のまち**でした。
「はやし千軒」といわれて昔は大きな賑わいがあり、みんなが時代に応じた漁や商売を考えてきたんですけんど、やっぱり高度成長期からは就職して外へ出てゆく若い人が増えたねえ。

KOMAP 2003